

江亭驛口暫停旌
風剪林梢寒有聲

又是天涯幾日程
伏枕不堪思往事

漁艇晚炊烟乍起
殘燈獨坐夜三更

陳星漸落月初明

鳥啼簷角飛無定

【読み】

江亭驛口（えきこう）に 暫（しばらく）く旌（はた）を停（とど）む また是れ 天涯（てんがい）幾日の程ぞや
漁艇 晚炊（ばんすい） 烟（けむり） 乍（たちま）ち起こり 陳星（ちんせい） 漸（ようや）く落ちて 月初
めて明らかなり 鳥 簷角（えんかく）に啼きて 飛ぶこと定まらず 風 林梢（りんしょう）を剪（き）つて 寒
さ聲（こえ）有り 枕に伏して往事（おうじ）を思うに堪（た）えず 燈（ひ）を残して 獨（ひと）り坐す
夜 三更（さんこう）

【意味】

江辺の亭（旅の館）や駅の入りに、しばらく旗（旅の一行）を止めた。またしても、はるか彼方への旅路
：あと何日続くことだろうか。川辺では、漁夫の舟から夕餉の煙がふと立ちのぼる。夜更けて、夜の終わりを
告げる星がしだいに沈み、月があらたに明るみ始める。軒端では鳥が鳴き、あちこち定まらず飛びまわって
いる。風が木の梢を切るように吹き抜け、寒さが音を立てているようだ。枕に伏して、過ぎ去ったことを思う
のがつらい。灯の残り火の下、ひとり夜半（三更＝深夜）に座りつづける。

*旗…旗を指すが、旅の一行を象徴

*陳星…しだいに沈みゆく星々

*往事…過ぎ去った昔の事

【出典】宿江寧鎮（清・寶遴奇（とうりんき））

とうりんき

※この詩は、旅の途中で一夜を過ごす詩人が、異郷の寂しさ・人生のはかなさ・過去への思慕を、風や灯、
鳥の声といった夜の自然描写を通して表現した作品です。

國朝畿輔詩傳卷三- 竇遘奇破

三月晦日作

野水滿橫塘蘿痕印短牆雨來旋鶴井風急亂鶯簷
牖納朝霽空亭受晚涼一卮聊自醉未曉尙春光

遣懷

年老鈔書讀逢人敢醉狂衣裳資草木談笑盡農桑蘿
徑招幽客山禽戀小堂桃源隨處有何必問漁郎

譙郡有懷

征馬長嘶古道傍江山猶是舊斜陽但看飛蓋稱才子
詎料當塗竊帝王細雨斜侵羅襪冷春風輕颭菜花香

國朝畿輔詩傳

卷三

七

千秋欲弔奸雄蹟野雉空飛過白楊

壽春暑中雜咏

八公山上列連營千載如聞草木聲投水無鞭駢晉壘
賭棋有屐卻秦兵荒邱漠漠孤猿嘯落葉蕭蕭旅雁鳴
勝地名賢兩寂寞白雲蒼狗幾回更

宿江寧鎮

江寧驛口暫停旌又是天涯幾日程漁艇晚炊烟乍起
疎星漸落月初明烏啼簷角飛無定風翦林梢寒有聲
伏枕不堪思往事殘燈獨坐夜三更